

## 勉強会を活用した組織成長モデル ～活動2年目の成果と課題～

伊藤 修司  
SCSK 株式会社  
Shuuji.Itou@scsk.jp

山口 真  
SCSK 株式会社  
Makoto.Yamaguchi@scsk.jp

豊田 圭一郎  
SCSK 株式会社  
Keiichirou.Toyoda@scsk.jp

### 要旨

#### 1. はじめに

ソフトウェアシンポジウム 2017 にて紹介した、「参加型勉強会を活用した組織成長モデルの事例報告」について、活動2年目で組織はどう変わったのか、継続的な活動による成果と課題を事例として報告する。

#### 2. 事例概要

##### 2.1 「参加型勉強会」について

座学によるスキルや知識の習得を目的とした「通常の勉強会」とは異なり、グループワーク中心でアウトプット重視の勉強会である。物事の捉え方や考え方をバージョンアップする気づきやヒントを得るための場で、参加者全員が主役となる演出がポイントである。

##### 2.2 「参加型勉強会」運営上の改善点

1年目の課題を受けて、2つの観点で運営を改善した。

###### (1) オープンな体制

1年目の会は一定の成果を収めた半面、企画するには、相応の知識と覚悟が必要との思い込みが生まれ、活動そのものについて敷居が高くなりつつあった。

そこで、今年度は、運営メンバーを常時募集とした。この活動に興味のあるメンバーは希望すればいつでも運営に携わることができるようにした。結果、入社5年未満の若手を中心とする13名で勉強会の企画・運営を進めることができた。

###### (2) 勉強会のアウトプットを明示的にプロジェクトで活用

1年目の活動を通じて、ふりかえり [1] だけでは、想いやアイデアをプロジェクトにつなぐのは難しいというのがわかった。そこで、予め勉強会のアウトプットを、プロジェクトで活用する前提でテーマを設定した。

例) Aプロジェクトで考慮したいテスト観点を考えよう！  
学びを応用し実行する場 [2] を予め設定することで、2つのプロジェクトのテストシナリオ作成にこのアウトプットを活用することができた。

#### 2.3. 「参加型勉強会」の成果

##### (1) 人材育成との連動

年間4回開催のうち、前半の2回は若手メンバーが企画からプレゼンまでを担当した。若手メンバーにとっては、自らが主体となって周囲を巻き込みながら仕事を進める予行演習となった。また、中堅以上のメンバーは、若手のプレゼン能力の高さを目の当たりにして、よい意味での脅威を感じる機会となった。

##### (2) プロジェクトの品質向上に寄与

プロジェクトにおけるテスト観点をワークのテーマとして、そのアウトプットをテストシナリオ作成の観点到して活用した。シナリオテストの不具合検出率が従来プロジェクトよりも向上した。

##### (3) 参加率の向上と学ぶ機会の増加

(1) 人材育成との連動や(2) プロジェクトとの連動を強化することで、勉強会への参加率が1年目よりも向上した。また、メンバーの退職や異動の際は、勉強会形式で引き継ぎを進めたり、ベテラン層が若手に勉強会形式で知見やノウハウを伝えたりする機会が従来よりも明らかに増加することとなった。優秀な講師は社内にいる [3] ということを改めて再確認した。

#### 2.4 今後の課題

今後の課題として考えているのは3つ

- ① この活動を変化させながら継続するための工夫
- ② 人材育成活動との更なる連携
- ③ コミュニケーション量と質の可視化

2年目を終えて、活動を継続することの重要性を改めて実感した。今後も活動を継続することで、業界全体に有益な成果、知見として発表できるように努めたい。

#### 参考文献

- [1] これだけ! KPT 天野 勝著 すばる舎 ISBN978-4-7991-0275-6
- [2] ファシリテーション入門 堀 公俊著 日経文庫 ISBN: 978-4-532-11026-0
- [3] WORK RULES! ラズロ・ボック著 東洋経済新報社 ISBN: 978-145-553484-5